

弱くて強いもの

川口 よしこ

雪がちらつき始め、冬がやってきました。庭の木々は落葉したためにすかすかで、雪の白さが広がってみえます。庭にはびこったスギナやギシギシ、シロツメクサなど強靱な草花も寒さには耐えられなくて、地上部は姿を消しました。

そんな中、屋内の窓辺はまだ暖かいらしく、鉢植えの植物たちは窓辺を陣取り、緑色の葉を広げています。それでも毎年この時期になるとどうしても葉が落ちてしまいます。葉が枯れてくると、その植物自体が枯れてしまうのではないかと気が気ではなく、春になりまたたくさんの葉が出てくるまでヤキモキさせられます。

観葉植物のパキラは1年に3cmほどしか伸びなくてやはり冬には葉が枯れ、細い幹だけになってしまいます。春先すぐに花を咲かせるユキワリソウ（ミスミソウ）は蕾みをいくつか膨らませていますが、同じく春を告げる植物のフクジュソウは、今年の夏に葉が枯れて以来、生きているのか死んでしまったのか、気配を消したままです。

せっかくここまで育ててきたのにとすると、過保護だとは分かっている、つい部屋の中に鉢をいれてしまうのですが、それでも鉢植えの植物たちはなんとなく元気ありません。

自然界では、雨・風に当たり、雪の下に埋もれても、春になればまた植物たちは生長を始めます。毎年同じところに芽をだすものもあれば、風にのり新しい環境へと移動するものもあり、多少の違いはあるにせよ植物はどこかで必ず生きていこうとしています。

昨年4月頃弥彦山へ行った時に、ユキワリソウの自生地がみられました。古い登山道を登って行くとまだ冬芽の開かない林の下には、白や紫、うす桃色の小さな花がたくさん咲いていて、こんなにあったのかと驚きました。夏の間は姿がみえないけれど、植物の生命力は強いものだと感心しました。

しかし近年はこのような自生地は減ってきているとよく言われます。『我が国における保護上重要な植物種の現状』（レッドデータブック）では、絶滅の危機にある植物として約895種が挙げられています。それ以外にも個体数の減少している植物はたくさんあることでしょう。

自然はこれまで大きな時代の流れの中で少しずつ変化しながら現在のような状態になってきました。自然を変化させるものの中には人間も含まれます。例えば、コナラなどの雑木林ができた背景には人間の生活活動が大きな原因となっているように。ただ、近年の人間の活動は変化が大きく、これまで自然との間に保たれていた微妙な均衡が崩れてきたのではないのでしょうか。

自然を保護する、植物を保護するためには、その微妙な均衡を保つことだと思います。本来、植物はたくましく生きているものなのだから、環境さえ整えば鉢植えのようにあれこれ手を懸けなくてももりっぱに生きていけるのではないのでしょうか。

そう考えた時、私の部屋の鉢植えたちはむしろ、鉢という開発の中で生きている弱い存在なのではないかと思ってきました。



写真1 ユキワリソウ（株）
西蒲原郡分水町早向川(1995. 3. 28)

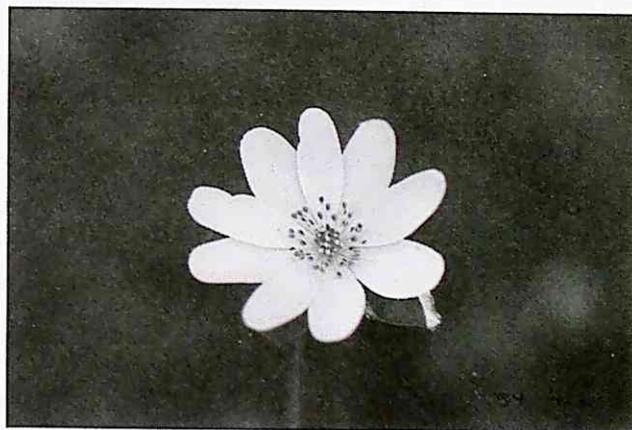


写真2 ユキワリソウ
西蒲原郡岩室村宝川(1994. 4. 16)